

<大賞>

「生きる～ある俳優夫婦のダイアログ」

北海道テレビ放送 沼田博光さん



俳優、劇作家、演出家、そして、脚本家でもある斎藤歩さんは、40年にわたってテレビや演劇、映画、アニメの声優など、幅広く活躍し、尊敬をあつめていました。

ところが、2021年にがんが見つかり、2023年には、「ステージ 4」に。「何もしなければ余命半年」「ふつうなら入院して安静にしていなければならない状態」と医師に告げられます。

そのような中、障害のある子とない子が一緒に演じるアイヌの民話をヒントにした劇を書き上げて成功に導くなど、歩みをやめません。

病状が進み、一人での生活が難しくなっていく中、妻で女優の西田薫さんに4カ月間のツアーのオファーがとどきます。三谷幸喜さんが主宰する東京サンシャインボーイズの30年ぶりの企画です。「公演旅行中に夫の命は消えてしまうかもしれない」と恐れ、妻は断ろうとします。背中を押す夫との息詰まる対話。

人は、結末がわかっていても前を向いて生きることができる。相手を思いやることができる。自分がどんな状況でも、相手の背中を押すことができる。そのことが、映像で静かに語られます。

死の瞬間さえ鮮明に記録されています。大学生時代から演劇活動をともした同い年の沼田博光さんが、ディレクター・記者・撮影の一部・ナレーションをつとめたからこそ、と思われま。

「食い入るように見てしまった死にいたる道。生きるということのほんとうの重みを感じた」「見終わったあと、死の悲しみより、やりきったという感覚・感情がわいてきた。不思議な作品」「人の死を身近に接する機会が減ったいま、死を迎えるとはどういうものかを提示した貴重な作品」と高く評価されました。

<優秀賞>

「負ケテタマルカ!!」

鹿児島テレビ放送 四元良隆さん

7歳で小脳に悪性腫瘍が見つかった紘輝くん。170万人に1人といわれる難病と向き合いながら、病院内の学級で、絵を描くことに出会います。両親と病院スタッフに支えられながら、毎日を精一杯に生き、母親に問いかけます。「何なんだろう……人間、人生って…… 人生が終わって、後は、どうなるんだろう……」

憧れのドラゴンや憎い悪魔。鮮やかな色使いに、「負ケテタマルカ!!」という思いを込めた作品は、美術コンテストで相次ぎ受賞しました。



そして、2007 年に 12 歳で亡くなります。多くのドキュメンタリーは、主人公が亡くなったら幕を閉じるのですが、彼の遺作 30 点の個展を開く機運が高まり、全国に広がります。

鹿児島、小さな町の、ありふれた家族 3 人が全力で闘った 20 年を追いつけた理由。「子供たちの死因の1位は自殺。少年と家族の記録を通して、今この日本で、世界で、涙を堪えながら暮らす人々に“何があっても生きること”。“圧倒的な絶望の、その先に、『希望』はある”ことを伝えたかった」と、四元良隆さんはその動機を語っています。

「1 時間 45 分の長編だが、見終わって深い感動が残る」「がんと闘う子どもの感動物語に終わらず、少年の絵には、思いがほとぼししている」「人が生きるとは、生きた証はなんであるかを考えさせるドキュメンタリー」と、賛辞が寄せられました。



<優秀賞>

「ホスピス住宅や精神科の訪問看護に関する一連の調査報道」 共同通信社 市川亨さん

「医療費が食べ物にされている」 訪問看護師たちの MeToo 運動
「疑問を持ってはいけない会社」 ホスピス住宅最大手で私が見たもの
「私をここから出して」 生活保護で“がん末期”の男性、届かない SOS
「紹介してくれたら 150 万円」 老人ホームが入居してほしい高齢者とは
共同通信の市川亨さんのグループは、他社が追いつくことが難しい深刻な特ダネをわずか 1 年半の間に連発しました。

そこから 4 つの不正の手口が浮かび上がります。

- ① 必要ない人にまで「1 日 3 回」「複数人で訪問」「早朝・夜間・深夜の訪問」を設定
- ② 数秒、数分の訪問でも 30 分いたことにして報酬請求
- ③ 「複数人で訪問した」などと虚偽の記録をつくって加算報酬を請求
- ④ 声を上げると異動や退職を促す

背後にある構造にもメスを入れています。



「ひとつの事業者の不正行為ではなく、業界全体でこの手法が広がり、制度に穴があいていることを示した」「急成長した企業が経営する『名ばかり訪問看護』の営利主義に切り込んだ」「末期がん・難病患者向けのホスピス型住宅における組織ぐるみの不正請求の実態を、内部告発も含めた独自の取材源による綿密な取材で明らかにした」「不正・過剰な報酬請求による犠牲者は、税金・保険料を納めている国民全員なのだとすることを明らかにした」「調査報道の手本」と称賛されました。